

美容液における「とろみ」の嗜好調査

Preference sensory evaluation on the thick texture of the beauty essence

平山 智代、 内沢 秀光

1. 背景・目的

弘前地域研究所の美容・健康実証施設化粧品製造エリアを活用して、現在県内企業の化粧品開発を支援している。美容液は、スキンケア化粧品の中でも訴求成分を多く配合している付加価値の高い製品である。「とろみ」（粘性）のある美容液に効果感や高級感を感じる消費者が多いことから、化粧品に「とろみ」を付与する材料である水溶性高分子の中で最もポピュラーなカルボマー及びキサンタンガムについて、テクスチャーの好みを調査したので報告する。

2. 内容

市販されている一般的な美容液と同程度の粘度（700～800mPa・s）になるように増粘剤の種類・濃度を調製した美容液を試作した。

弘前地域研究所の所内公開に来訪した 10 代から 80 代の女性 45 人をモニターとして、好みの順番を調査した。結果を 30 代以下の若年層（22 人）と、40 代以上のエイジング層（23 人）に分けて比較したところ、若年層ではカルボマー、エイジング層ではカルボマーまたはキサンタンガム（糸引き無し）が上位となった。また、若年層・エイジング層ともに増粘剤なし、またはキサンタンガム（糸引き有り）が下位となった。これらの結果から、若年層の多くはカルボマーに代表されるさっぱりしたテクスチャーを好み、一方エイジング層ではそれに加えてキサンタンガムに代表される少し粘性のあるテクスチャーも好まれることが分かった。また、とろみが全く配合されていないものや、逆に糸を引く様なベタベタしたテクスチャーは全年代を通して好まれない傾向にあることが分かった。

3. 活用

県内企業に対する化粧品の処方支援において、この結果を反映させていく。

